



子どもたちの笑顔がいちばん
福浦らしさを忘れず、
前へ進む。

再び訪ねて
福浦小学校を

2011年3月11日、福島県南相馬市は東日本大震災による地震と津波、東京電力福島第1原子力発電所の放射能汚染という三重の災害を受けました。今もなお警戒区域内にある小高区おたかの福浦小学校は、2010年11月に食育の取材でお邪魔した小学校。本誌139号に取材記事が掲載されると、それを読んだ名古屋市立大森北小学校6年1組の今枝先生と子どもたちからお手紙と千羽鶴が贈られました。大震災から半年が過ぎた10月中旬、福浦小学校の避難先である鹿島区かしまの八沢小学校やきわに、安齋郁子校長先生をお訪ねし、お話を伺いました。



安齋郁子(あんざいいくこ)校長先生

4月22日 9人だけで授業を再開

取材日の10月12日現在、福浦小学校は、原発から32キロ離れた八沢小学校の校舎内に市内5校(福浦小・原町第二小・高平小・大甕小・太田小)と共に間借りし授業を行っています。福浦小学校の全校児童は、年度当初は122人いるはずだったのですが、震災により県内・県外への避難が相次ぎ、今は約4分の1の31人に減ってしまいました。

6校共同での新学期が始まったのは4月22日。八沢小学校の総児童数は120人から344人に増え、教職員も12名から52名に急増しました。福浦小学校の児童数は、わずか9名でした。8月25日に2学期が始まると、やっと31名に。今後、仮設住宅への入居や生活の場が整うと、少しずつ戻ってくる児童は増えてくるそうです。授業は、6校の児童全員を学年別に再編成したクラス(各学年1~2クラス)で行われています。安齋校長先生にお話を伺うと「授業を再開した当初は、学用品などあらゆるものが足りませんでした。廊下にも机を並べて勉強したり、校庭には出られないので体育館で運動したりなど、とてもたいへんでした」。

続けて「10月17日からは、八沢小学校の校庭に仮設のユニット校舎が完成し、福浦小学校として、ようやく“独立”できることになりました」と、笑顔で話します。しかし、このユニット校舎もあくまで仮住まいで、次は鹿島小学校内の仮設校舎へ移転するそうです。



教室内、混成クラスなので体育着もそれぞれ



校庭に建つ福浦小学校のユニット校舎

※10月17日現在、緊急時避難準備区域が解除されたことで、大甕小は元の校舎で学校再開。太田小は、八沢小から大甕小へ移転。

「震災当日、小高地区にある福浦小学校には、500人もの近隣の人たちが避難していました。みんなで助け合いひと晩を過ごした翌日、原発が爆発したという思いもよらない情報が入り、全員が小学校を後にしました。大地震にも耐え、津波にも襲われなかったあの大切な学校に、3月12日以来、一度も帰っていないのです」。

子どもたちの心のケアに 県内をまわる日々

安齋校長先生の話は続きます。「私は、子どもたちが区域外就学している相馬市や福島市、二本松市などの小学校を順番に訪ねました」。



掲載記事で友達を見つけ、笑顔で盛り上がる



首から提げているガラスバッチ(積算線量計)



大森北小学校から贈られた千羽鶴



兄弟のように仲のよい6年生全員

とても遠いのに、自分たちのことを考えてくれてうれしい

お手紙たくさん書いてくれてありがとう

千羽鶴、見ると勇気が出るよ

ありがとう、自分たちも頑張らなきゃと思った

自分たちでできることで、いつか恩返ししたい

子どもたちは、校長先生の学校訪問を楽しみに待っていてくれて、いろいろと話してくれたそうです。校長先生は、他校で学ぶ児童の様子を知らせたり、「困っていることな〜い?」と聞くと、「平気だよ」「楽しくやってるよ」と元気な笑顔で返事が返ってきます。しかし、「福浦に帰りたい、いつ帰れるの」と聞かれることも多く、自分を逆に気遣う笑顔の奥に、子どもたちのつらさや寂しさを感じたそうです。「震災前、当たり前にもみんなで過ごしてきた日常が、こんなにも懐かしく愛しいものだったということ、再会の喜びとともにしみじみと感じました」と校長先生は話します。

困難や環境の変化に たくましく順応する子どもたち

子どもたちの毎日は、困難の連続で

す。登下校は、保護者の車で送り迎え、または大型バスでの集団送迎です。校舎外へ出るときは、長袖・長ズボン、帽子とマスクは欠かせません。10月17日から、やっと校庭で遊べる時間が1日2時間になりました。仮設住宅など住む場所もバラバラなので、放課後、お友だちの家に遊びに行くこともできません。

環境は激変しましたが、子どもたちは元気です。集まってくれた6年生7人に、八沢小学校に来てどうですか?と聞くと、「他校の子とも友だちになれたよ」「言葉や遊び、話題が違うのでビックリ」「こっちの水道は自動だけど、福浦は手でひねったよ」など、違いや学校差に気づきながらも、それを楽しんで自分なりに消化して頑張っていることが伺えました。

安齋校長先生は、「この困難な時

期にあっても、明るく元気で素直なところや、みんなが仲良しの“福浦っ子”らしさを守って伸ばしていきたい。学校あつての地域、地域あつての学校なのだという強いつながりを再認識し、近い将来に小高区おたかのあの校舎と校庭に帰り、地域とともに復興していきたい」と希望をこめて話しました。

以前と変わらない安齋校長先生や明るく屈託のない子どもたちに再会でき、2010年秋の「芋煮会」取材した時のような、温かくおだやかな日常が一日も早く福浦小学校と東北の被災地に戻ってくるよう、心から祈ってやみません。



震災前と比べ、まだまだ簡単な給食